

統計を活かす

—利用者の立場から—

茨城県農業協同組合
中央会 会長 鯉淵丈男

統計表が作成され、われわれが手にするまでには、いくつかの段階を経て、非常に大変なご苦労がひそんでいることと拝察する。まず、調査する段階、集計の段階、分析の段階、印刷の段階、配布の段階等考えると、一枚の統計表といえども、非常にコストの高いものになっている。したがって、これを見る立場（利用者）としても、充分に努力してこれを活用する姿勢が必要なわけである。

もともと、統計を作成する立場としては、その歴史的動機、統計学ないしは統計法等の諸種の制約の中にあっても、刻刻、変化する経済情勢に対処して、技術的に相当の進歩をとげているが、一方、ひるがえって、これを手にして見る利用者側にあっては、依然として、「見た。」「わかった。」だけに終始しているとすれば、その統計表の生命は、何か非常にはかないものであるような気がしてならない。

作成者としては、その統計表によって当然のことながら、より多く、より深く、数字からの内容を識者に知ってほしいと考えるはずであるが、利用者側は、一般的にはいろいろの事情から、その意図について行けないのが実情である。『作者があるから、利用する。』ということと、『利用する者があるから、作る。』という目的論的比較においては、両者の間の意識において、相当の開きがある。統計に限らず、何事もそうであるように作成する者と利用する者との間の認識に、著しい懸隔があっては、その統計の活用および発展はおぼつかない。だからこそ、両者の認識の歩み寄りということには、大いに努力しなければならないと痛感するのである。ここにおいて、今後は、利用者側も「見る技術」というものをいっそう、学ぶ必要があるし、ひいては、積極的に活用する姿勢を考える時にきている。たとえば、行政における一次的統計をもとに、利用者における二次的統計（業務統計）の作成、あるいは、今後ますます盛んになるであろうところの推測統計に対し、自己の立場からする分析、または、統計集団と業務上の行動集団の接点の検討、および目標管理と統計の関連づけ等々、利用者としても、単に座して見る統計でなく、一歩突っ込んだ見方がつねに大切であり、これが作成者と利用者間の実質的コミュニケーションの場を、相まって作りあげる基本になると考えるのである。

したがって、作成する側としても、統計表の伝達という分野を含めた広義のP・R活動は、ますます重要性を持つ今後の大きな課題であろう。

現在の情報化時代は、見方によっては、情報の混乱時代ということもできる。ここにおける確然たる統計の立場は、また、さらに重要性を増してきている。そうすると利用者側からも、作成者側に対して注文が相当でてくるであろうし、でて来なければならないはずである。その時に、両者の密接なコミュニケーションがあって、はじめて、さらに進んだ統計が生まれることになるであろう。そのためにも、現在の時点から、作成者には、ますます技術の発展を望むと同時に、利用者も、それに対応できる素地の醸成の必要性を感じるものである。